

本多静六通信

創刊号

発行
本多静六博士
を記念する会

本多博士の情報 発信基地として

菖蒲町長 遠藤 淳 二

当町の名誉町民である本多静六博士の顕彰事業が、マスコミを通じて報道された後、町内はもとより全国各地から様々なお便りや問い合わせを頂きました。没後四十年を経過した今でも、

博士に深い関心をお持ちの方が多くことに改めて感慨を深くしました。

顕彰事業の一つとして発行するこの「通信」

は、博士を初めて知る方、また生前の博士をよく存じ上げている方、そして博士の業績を研究されている方などのお役に立てれば幸甚です。

わが菖蒲町といたしましては、博士についての「情報発信基地」としての役割を担うことによつて、博士の遺徳に応える町民の思いを示したいと思います。

考えている次第であります。ところで、地球的規模で環境問題が論じられている今日、博士の学問的業績は、単に日本林学界の基礎を築いたというばかりでなく、まさに環境問題を先取りしたものと言えます。

一方、博士は無類の勤勉家としても知られているところですが、その生活信条



本多静六博士

は、同時に飽食の時代にある現代人への批判とも受け止めることができます。このように、本多博士はわが菖蒲町の生んだ全国に誇れる偉人であります。今後、関係者の理解と協力によつて本誌が継続して刊行され、この「通信」をとおして、博士についてのご理解を深めていただくことをお願いいたします。

本多静六博士生誕地記念園 に胸像を建立

博士の顕彰事業の一環として、生誕地である河原井の近く国道一二二号沿いの一角に記念園が整備されました。広さは約四百平米。園内には博士の胸像が設置されているほか、博士ゆかりのイチヨウ(日

わがふるさとの大森八人、菖蒲町名誉町民本多静六博士の遺徳をたぐひ、没後四十年の今日、ここに生誕地記念園を整備しました。博士は、生誕の地河原井を背に、こゝなく移された秩父の地に目を向けられておられます。そして、博士が寄贈した大森村中津川の原有林には、森林の重要な意義をふんずけるため「二十一世紀の森」が整備されています。博士は、昭和二年(一八六六)現在の菖蒲町大字河原井の新原家に生まれました。後して本多家の養子となり、若字を継ぐ東京農科大学(現東京大学)・さらにライプツィヒのモントペリエ大学を卒業し、日本最初の林学博士となりました。博士は日本林学界の基礎を築くとともに、日比谷公園や大宮公園などの建設に携わりました。ちなみに日比谷公園に掲示されている「首かけいちょう」の逸話はよく知られているところです。また、博士の努力と主観を旨として大森の教員は広く敬慕されており、多くの著書や県の「本多静六博士顕彰事業」からもこれを伺い知ることが出来ます。このような博士の業績と人格はまさに郷土の誇りであり、ここに家業をたえなく後世に伝えるものです。平成四年十月 菖蒲町

▲本多静六博士胸像碑文

比谷公園の「首かけいちょう」を接ぎ木したもの)やユリノキが植えられています。また、胸像の台座には秩父郡大滝村にある中津川県有林産の石が使われています。

日本最初の林学博士

本多静六

—その業績と人柄—

本多静六博士は、明治から昭和にかけて日本の林学、造林学の基礎を築いた人で、日本最初の林学博士となった人として広く知られています。また博士は、専門的林学を通じ、日本全国はもとより、十九回にも及ぶ海外渡航により世界各地の研究視察を重ね、その貴重な情報を基に、日本経済の発展にも大きく貢献しました。

博士は林学界はもとより、多方面に亘り活躍された方で、その交友範囲は本県出身の実業家、渋沢栄一をはじめ政治家大隈重信、後藤新平、医学者北里柴三郎、農学者新渡戸稲造ら各界の著名人に及んでいます。

博士は、慶応二年七月二日河原井村の折原家に生まれました。明治十七年に東京山林学校に入学したのを契機に林学に携わるようになり、長じて明治二十二年本多家の婿養子となり、翌二十三年東京農科大学を卒業と共に、ドイツへ留学、明治二十五年ミュンヘン大学においてドクトルの学位を取得しました。

博士は、明治二十五年に東京農科大学（現在の東京大学農学部）に奉職して以来、昭和二年に退職するまでの間はもとより、退職後も当時

の東京府、内務、文部、鉄道、陸軍など各方面の委員、嘱託、顧問として林学の普及に尽力し、日比谷公園、明治神宮神苑、大宮公園、羊山公園をはじめ、鉄道防雪林や、国立公園、各地公園、風景地、水源林などの設計改良にあたるなど、今日の日本社会の発展に大きく貢献しました。

さらに帝国森林会、日本庭園協会、都市美術会、風景協会、国立公園協会その他十八あまりの会長または副会長としても尽力し、渋沢栄一などの大実業家の顧問として働き、民間事業の育成発展にも大きく寄与されました。

また、博士は「四分の一天引き貯金」を自ら考えだし、実践し、無駄を省いた節約貯蓄により、多額の財産を築いた資産家としても高名です。しかし、博士は大学教授を定年で退職した後、これらの財産のほとんどを公共の事業に寄付し、自らは簡素な生活を続けつつ、社会発展のため、昼耕夜学し公職に尽力されました。

現在、埼玉県で実施している「本多静六博士育英事業」は、博士が少年期における自らの苦学の経験を基に、昭和五年に、所有していた大

滝村中津川の山林（実測面積約二七〇〇ヘクタール）を奨学金制度の実施などを希望条件として、県に寄付したことに始まるものです。この奨学金の貸し付けは、昭和二十九年年度から始まり、これまでに一〇三七名（平成四年度現在）の方が利用しています。

これら博士の広範多岐にわたる功績は、三七六冊にも及ぶ著書からも証明されるものです。内訳は教養書五三冊、造林学書三十冊、一般林学書二八冊、造園関係書一二六冊、全集または叢書の中の分三五冊、その他の著書一〇四冊（武田正三著「本多静六伝」による）で、これらの著書の多くは、現在でも貴重な文献として広く利用に供されています。特に教養書の多くを占める博士の人生論、幸福論、そして成功への体験論は、今でも多くの読者を持ち深い感銘を与えています。

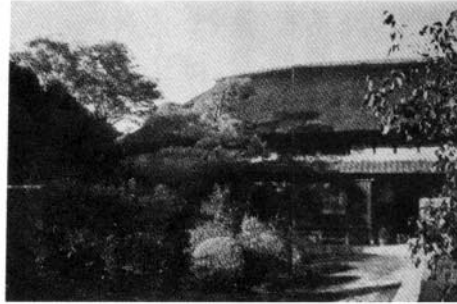
博士のこうした功績は、とりもなおさず生涯の地である菖蒲町の誇りであり、本「通信」をとおして長く後世に伝えるものです。



東京日比谷公園にある博士ゆかりの「首かけいちょう」

博士と生家

—河原井・折原家—



博士の生家・折原家(当時)

博士の生まれ折原家は、江戸時代から代々河原井村の名主役を務める家柄であった。博士はここで父長左衛門、母やその三男として生まれた。博士の著書等には、父の名前を「禄三郎」と記したものもあるが、戸籍の記載及び折原家に残る古文書には父の名は「長左衛門」と記載されている。(禄三郎は字と考えられる)

また、折原家は博士の生家として知られているほか、幕末から明治、大正、昭和初期にまで盛んであった不二道の布教の場としても知られている。不二道とは富士山信仰に起源をもつ、一種の宗教であるが、折原家は多くの信者を集めたほか、教祖小谷三次の高弟として布教活動に努めた。博士は子供のころからこの不二道の影響を強く受けていた訳であり、生涯を通じて精神的な支えとなっていたことが推察される。

幸福寺とサイカチの木

河原井の幸福寺は、明治六年に初めて博士が入学した学校であり、博士ゆかりの寺ともいえる。また山門のところには、サイカチという大木があり、訪れる人の目を引く。サイカチはマメ科の落葉高木で、現在では余り目にする事のない珍しい木となっている。

このサイカチは博士とも関係があり、子供の頃、近所の子供達とよくこの木で遊んだという話が残っている。当時幹に洞があり、中で子供が遊べるくらいのスペースがあったという。

サイカチの木とは別に実はごく最近、この寺で大きな出来事があった。寺から江戸時代元禄期に作成されたと思われる円空作の「不動明王像」が発見されたのである。



往時をしのばせる幸福寺とサイカチの木

三百年以上も前に作られ、暫くの間忘れ去られていた円空仏が、博士についての調査が始まったことをきっかけに今蘇ったことは博士の遺徳を偲ばせるものであろう。

年譜

年号(西暦)	年齢	事 歴
慶応2年(1866)		葛浦町河原井に生まれる。
明治17年(1884)	17	東京山林学校へ入学する。
明治23年(1890)	23	東京農林学校を卒業し、ドイツへ自費留学。
明治25年(1892)	26	ミュンヘン大学でドクトルの学位を取得。帰国後東京農科大学(現東京大学農学部)助教となる。
明治32年(1899)	32	日本で最初の林学博士となる。以後教職の傍ら政府・企業等の委員・顧問等を歴任する。
明治33年(1900)	33	東京帝国大学農科大学教授となる。
明治34年(1901)	34	東京市より日比谷公園設計調査委員を委嘱される。
明治41年(1908)	41	防雪防風林及び鉄道用材調査を嘱託される。
大正4年(1915)	48	大日本山林会理事に選任される。
大正7年(1918)	52	日本庭園協会の理事長となる。
大正10年(1921)	55	埼玉県学生誘掖会会頭となる。
昭和2年(1927)	61	東京帝国大学を退官し、名誉教授となる。講演・著述生活に入る。
昭和3年(1928)	61	日本庭園協会の会長となる。
昭和4年(1929)	62	国立公園協会の副会長となる。
昭和5年(1930)	64	秩父郡大滝村中津川の山林を埼玉県に寄贈する。
昭和6年(1931)	65	埼玉県学生誘掖会及び埼玉県学生会の会頭となる。
昭和8年(1933)	66	日本庭園学会の会長となる。
昭和14年(1939)	72	東京都より宮城外苑整備事業審議会の委員を委嘱される。
昭和15年(1940)	73	大日本山林会の顧問となる。
昭和27年(1952)	85	静岡県伊東市において逝去する。

題字

題字の「本多」は博士の養父であった本多晋氏の自筆、また「静六」は博士の自筆によるもので、共に博士の生家である折原家に所蔵されていた書状からとったものです。本多晋は、幕末明治新政府に抵抗して結成された彰義隊の頭取として広く知られています。

本多静六先生を偲ぶ(一)

島田得一

本多静六先生に、じかにお会いして、話を交わした人は、平成四年の今となっては、そんなに多く残っていないと思う。

ところが、実は、僕はその一人なのである。

昭和九年三月、僕は盛岡高等農林学校林学科を卒業した。三か年間の学業を卒えて、成績優秀をもって卒業したというのが、結婚式の仲人の祝辞だが、実は僕は成績優秀ではなかった。

僕の中学時の考えは、高等学校へ入り、それから東京帝国大学へ入り、文学をやりたいかった。不動岡中学五年を卒業して浦和高等学校をめざしたが、母親は僕を理乙(独逸語)を受けさせて、医者か林学士にさせたかった。その通りに



著述に励む博士(晩年)

受けて失敗した。その以前に僕は盛岡高等農林学校林学科が合格していた。これは中学や農林学校の成績の良い者は、口頭試問だけで入学出来た。今の推薦入学に等しかった。僕は浪人して再度高等学校へ挑戦したかったが、両親はこれを許さなかった。学則に依れば、盛岡から東京帝国大学以外の京都、東北、九州、北海道帝国大学等への受験入学が可能である。入ってから若し大学へ行きなければ受験すればよいのではないかというのがその理由であった。

尤も、家も姉が浦和高女から東京女子大へ行っていて、一か月六十円位の学費がかかり、四苦八苦であった。両親にして見れば、早く学校を卒業させて月給とりに仕立て、家計を助けてくれればいいと思っていたに違いない。家は十町歩余りの小地主で、外に群馬県に八十町余りの山林を持っていた。山林を旨く経営すれば子供二人や三人の学費位お茶のこサイサイであった。僕の父親は京都府立医学専門学校を中退して以来、手に職無く、かと云って農業をやるわけではなく、一生旦那で通じた人だった。

余り家の内情を話すとボロが出るから、この話はこの辺でとどめたい。

さて、昭和六年四月の初め、笈あしを負うて(文字通り柳行李へ身の廻り品を詰めて)出掛けた所は盛岡の駅頭だった。久喜から汽車へ乗って九時間、へとへとに疲れて駅頭に降り立ったが、あたり一面知らぬ人許り、僕は女学生の一人を捕えて、上田という所にある盛岡高等農林はど

う行けばよいのかと尋ねた。然るに、その女学生の答えがどうもまことに奇妙な言葉の連発で、而もズーゾー弁、意味が半分もわからない。更に歩いて行けるのかと聞くと、「なーんたって、可成りな道のりでありやんすども、まんず、まんず、歩いていげねーこともねーがんすエー」と云うのだ。今だからこうして書くことも出来るし、標準語に訳すことも出来るが、当時早口でこう云われたので僕は動揺どうぶした。そして失望した。「これはえらい所へ来てしまった」というのが実感だった。

やっと学校へ着いて、事務員に手続を終えて導かれた所が自啓寮という看板のある木造二階建の一室だった。何やら玄関から寮の周辺が小便臭い。僕はギョツとして事務員に尋ねると、

「そんでがんすベナツス。もとは(本当は)いげねんでがんすども、寮雨というもんでナツス、下の土さめがげで、にげえの窓より小便ひるんでがんすヨー」という答えだった。ウンコはたれる、小便はひる、埼玉とまるで逆なのだった。

隣の部屋に精悍そうだが、田舎っぽい男が居た。「何処だ」と聞くと、「うん？俺かあ、俺、シヤマガタ」「なに？」「シヤマガタ、ソネザワ興譲館中学！」僕は考え込んだ。シヤマガタにソネザワ、ああ成程、「山形県の米沢興譲館中学か」「そんだ、そんだ」彼は莞爾えんじとして笑った。二日目、彼と寮の廊下で摺れ違った。彼が歩くとホコリが舞い上がるのだった。見ると彼は羽織へ帯締めてその上へ着物を羽織っている

るのだった。

「オイ、オイ飯塚（彼は飯塚藤吉と云った）お前、羽織と着物が逆だナ」「アニ？そんなな訳はねー、俺、お袋が番号振った通りに着てるツツオー、お前こそ違うでねーかあ」「馬鹿こくんでねー、皆んな見ろよ、お前みたいな着ざまの奴が誰一人居るかいは？」彼はギョツとして立ち止まって外の人達を見た。「んだナーヤー、……お袋が番号の振り方間違ったんだナーヤー」と彼は悄然とした。折角の米沢餅が台なしだった。

後の話だが、彼は学校から帰るとモンペ許りで過して着物など着たことがなかったのだった。斯くして三年、飯塚は僕と無二の親友になった。僕は三年間、とても一生けん命勉強する気分について成れなかった。その為め、教授達には申訳なかったが、真面目に講義を聴かない学生で終始した。

卒業、そして就職、学校からある県庁の林務課雇の口の幹旋があつたが、一カ年間日給制（月給一円四十五銭）というのが意に満たず迷つていた。そしてその頃満州国の林野局が職員募集をしている事を知り、海外雄飛に踏み切らんとしていた。

僕は事実兵役後満州国の営林署に就職したのであるが、話を本題に戻そう。

つまり昭和九年三月から四月頃の事、本多静六先生と云えば、僕等の就職等、そんな些細な事を手がける暇など無いことは百も承知

だったが、何しろ郷土の大先輩であり、日本林学界の泰斗でもあるこの大先生に会うことが出来る丈でも大変なことだし、更に何かのキツカケにでも成れば幸いと考え、僕は両親に相談し、そしてその手掛かりは直ぐに掴めた。

「ああ、河原井のparaどんかい（あだ名だったらごめんさい）、先生の兄さんが健在だよ、名のれば知ってるから行って見やつせネ」という山田金作氏（隣家・当時小林村長）のアドヴァイスを受けて、僕は砂糖ツ袋を持参して先生の生家を探ねた。僕の旧居も大きい萱葺（正確には葦と萱）の方だったが、折原家はもっと大きいような気がした。

縁側で先生の兄さんである折原金吾翁が早速会って呉れた。でっぷりした人で八の字髭を生やして、写真で見ると本多先生に似ていた。

僕は折原翁の書いて呉れた紹介状と砂糖袋をさげて、教えられた通りに、東京渋谷桜ヶ丘の先生の私宅を訪れた。家は小高いところにあつたが質素だった。上野彰義隊の子孫である上品な奥さんが玄関に立現われた。僕が来意を告げると奥さんは、「主人は只今赤坂溜池の大日本山林会の事務所へ居ります、そちらへお越し下さい。お電話をかけて置きます。溜池御存知かしら」と爽やかな声で云った。「ハイ、知ってます」。「では溜池の方へどうぞ、河原井の折原にもよろしくお伝え下さい」「ハイ、ハイ」という訳で、脇の下から汗をかき乍ら、赤坂溜池にある大日本山林会の事務所を探ね、事務員



ドイツ、ミュンヘン大学時代の博士(明治24年頃)

の人に折原翁からの紹介状を差し出した。待つ程に返事があつて先生の部屋に通された。部屋は天井が高く且つ稍薄暗く、先生の事務机の前には大きなテーブルがあつて、先生は向う側へ僕は入口の方へ相對した。先生は霜降りのような詰襟を着用し折原翁と同じくピンと八の字髭を生やし、顔に似合わぬ小さな眼鏡を掛けていたように思う。案内の事務員がドアを閉めて去ると、口の中が粘り出した。(以下次号につづく)

【著者紹介】島田得一氏は大正二年のお生まれで菖蒲町小林の出身です。昭和三十七年から昭和四十五年まで二期八年にわたり菖蒲町長を務められ、現在同町農協組合長、埼玉県農協中央会会長として活躍されています。さらに本記念する会の会長でもあります。

三箇小学校でお会いした 本多博士のこと

細田 嘉

私たちが三箇小学校に在学した頃は、校名も三箇村立琢玉小学校と言っていました。

本多静六博士は、この三箇村大字河原井の折原さんという家に生まれ、その頃日本ではただ一人の林学博士でありました。今の東京日比谷公園は本多博士の設計で完成したのだそうです。私たちは、よくよその村などに行き「どこの学校だ」と聞かれると、「本多博士の生まれた三箇の学校です」と答えたものでした。学校でも、よく先生から本多博士のようになれと言われました。

いま本多博士の思い出を二三あげると、私たちが三年生の頃、その日本一の本多博士が、三箇の母校に来るといいますから大変でした。その日私たちは、校門の前から校庭に二列にキチンと並びました。博士の乗っている人力車が校門のところまでピタリと止まりました。車から降りた博士は「皆さんご苦労様です」と申しました。その時、私たちはみんな「偉い人だなあ」と思いました。

私たちが講堂で待っていると、校長先生の案内で本多博士が入って来ました。校長先生の紹介が終わると、本多博士は壇上に立ちました。そして「三箇の学校の生徒さんは本当にお行儀

がよいですね。大きくなるとみんな立派な人になりますよ」と色々お話をして下さいました。

(ドイツのミュンヘン大学でドクトルの学位を受けるための演説討論試験会場で)博士論文を読み上げる時も、一人ひとりによく聞こえなうといけなうといいて、山の中の滝の音と比べて読む練習をしたそうです。試験会場に集まった人たちも、こんなによく分かる話は今までに聞いたことがないといいて感心したそうです。

また本多博士は大変な節約家で、洋服なども夏冬が二着あればよい、厚い寒いは下着で加減するから清潔であればよいのだ、とそうようにされたそうです。

皆さん私たちも、大先輩本多静六博士のように心も体も強い人間になりたいと思います。

※注(一)内は編集者補足

【著者紹介】細田嘉氏は明治三十五年のお生まれで菖蒲町三箇の出身です。昭和四十五年から昭和五十七年まで三期十二年にわたり菖蒲町長を務められ、多岐にわたる功績により本年一月菖蒲町名誉町民の称号が贈られました。



三箇小学校とユリノキ

三箇小学校博士の母校にあたる三箇小学校では、本年、卒業記念として博士ゆかりのユリノキが植樹されました。

博士の初の洋行日誌 (明治二十三年) を発見



▲洋行日誌(明治23年)
留学中の日々の様子が詳しく記されており、当時の博士の生活を知る上で第一級の資料といえる。

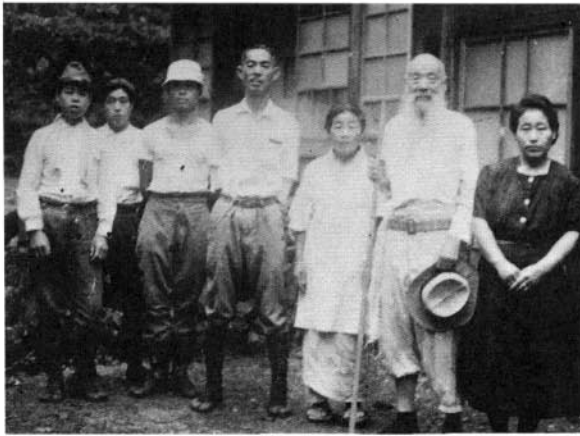
このほど本多博士の生家である折原家から、博士が明治二十三年にはじめてドイツに留学したときの模様を記した「洋行日誌」が他の貴重な資料と共に発見されました。日誌は二冊に分かれて和綴製本されており保存状態も良く、極めて貴重な資料といえます。

この日誌は、博士が定期的に日本に送った日誌(手紙)を清書したうえ製本したもので、明治二十三年三月二十三日に横浜港を出港した時の模様から、ドイツのターラントでの生活まで、同年八月十七日までの一四八日間にわたって細かく記されています。日誌の形態は、自分自身の日誌というよりは、むしろ日本に暮らす両親や妻に、日々の出来ごとや学業への取組みについて知らせる内容となっており、当時のドイツ

本多静六博士と大滝村

—中津川県有林と東大演習林を巡って—

秩父郡大滝村にある中津川県有林（面積二、六七六ヘクタール）は、昭和五年に博士が所有していた山林を埼玉県に寄付したのに始まるものである。また秩父郡にある東京大学演習林も博士所有の山林であった。博士は明治三十年頃に中津川を中心とする秩父の山林一帯を買い入れ、以後山林の経営を兼ね、たびたび秩父の地を訪れるようになった。そのような訳で博士と秩父、とりわけ大滝村とは深い縁ができたのである。



昭和25年7月30日、大血川東京大学演習林作業所前で撮影
右から佐々木あき、本多静六、山本とよ、住田芳太郎、
山本正一、山中峰治、馬場弘（敬称略）

今回、奇しくも本「通信」の発刊にあたり、趣旨にご賛同いただいた大滝村の助役山口喜三氏のご厚意により、県有林と東大演習林について調査を行うことができた次第である。

以下、調査の概要をご報告したい。
今回の調査で得られた大きな成果の一つは、県有林の成立及び記念碑建設までの経緯を記した「中津川県有林記録・佐藤筆記」（山口助役所蔵）を拝見できたことである。本資料は、博士の「山林寄付願」から始まり、昭和二十五年の県有林記念碑除幕式までの記録がつぶさに記載されており、県有林の生い立ちを知る上で極めて貴重な資料といえるものである。この資料は、当時県職員であった佐藤巳代吉氏（元飯能林業事務所長・山口助役の妹の養父・物故）が記録して残したもので、その後山口助役の下で保管されていたものである。

また、山口助役のご紹介により昭和二十五年当時に博士と直接お会いしたという山本正一氏（大滝村在住）に面会し、お話しを伺う機会を得た。山本氏は、昭和二十五年七月に本多博士（当時83歳）が大滝村大血川にある東京大学演習林を訪れた際同行した方で、そのときの記念写真も所蔵されていた。（写真参照）

山本氏の話によると、『大血川入口まで秩父セメントの車で来られた本多博士を出迎え、約六キロメートル先の演習林まで徒歩で案内をした。当時、大血川入口から東大演習林までは道は狭く、険しかった。そのため山本氏は、

（次頁につづく）

の様子や食事の内容、友人のこと、体の調子など身近なことまで詳しく記されています。
また、日記を読んでいくと当時の海外渡航の難しさや、日本と西洋との文化の差など、約百年前の様子が興味深く描かれており、生活史や文化史の観点からも歴史的価値が見出だせる内容となっています。



▲博士自筆の手紙(明治18年)



▲養父本多晋自筆の手紙(明治25年)

また、この日誌ともに博士自筆の書状や養父本多晋氏の書状など約三〇点が発見されました。これらは、折原家に保管されていたもので、日記同様博士を研究するうえで貴重な資料といえます。博士自筆の書状の多くは、山林学校時代から東京農科大学時代のもので、学校生活の様子や成績のことなど詳しく記されています。
記念する会では、今後も折原家、本多家のご協力をいただきながら、「洋行日誌」等の解説・分析をおして博士の足跡を解明して行く予定です。なお、日誌の詳しい内容については、第二号以降に掲載する予定です。



大滝村大血川にある東京大学演習林・けやき平

博士の腰に紐(三尺)を巻き、さらに紐を繋いで山道を引っ張って行った。博士が、こうもこの演習林に執着をもったのは、大正の初めに自らが植えたけやき(今ではその一帯を「けやき平」という)があったからだ。やっとの思いでけやき平に着いた博士は、四十年ぶりに再会したけやきを見るや、「大きくなったなあ」と目に涙を浮かべながら、自分の子供でも見るように眩(くら)いた。そしてひとしきり山林を見回した後、疲れきった体をござを敷いた地面の上にごろりと横たえた。設けた休み処には目もくれず木々の声を地面から聞き取るように気持ち良さそうに横たわった。帰りがけ、博士はけやき平の直ぐ側に記念植樹をした。植え終わったあと木の周りに柵をしようとしたら、博士は「そんなものは必要ない。木は自然に育てるのがいい。杭を打ったら、根がかわいそうだ」と言った。

この言葉は今でも忘れられない。』と山本氏は当時を振り返って懐かしそうに話された。以上が調査の概要である。末筆ながら本調査にご協力を頂いた皆様に改めて厚くお礼申し上げます。次第である。

お礼のことば

嫡孫 本多健一

本年平成四年一月、祖父本多静六は菖蒲町より名誉町民の称号を頂きまして深く深く感謝しております。此の度菖蒲町におかれましては本多静六顕彰事業として記念公園を造られ、ここに本多静六胸像を設置頂くことを伺いまして、一族として此の上もない名誉なことであり感激のほかありません。

改めて菖蒲町の皆様、遠藤淳二町長様はじめ御関係の方々に心より御礼申し上げます。

また三箇小学校におかれましては、本多静六の人生観を教育に反映させたいとお話を伊藤伸一校長先生より伺い、一段と光栄に存ずる次第であります。

私は孫として本多静六に可愛がられて参りましたので、祖父の厳しい面を余り知らず、祖父が私が二十七歳の時亡くなってから、却って他所様より祖父の人生観を教えられました。

此の度の菖蒲町の御厚志による顕彰事業のお話を承り、私共は祖父の名を恥かしめぬよう一層心を引き締めて社会のお役にたつて参りたいと思っております。

終りになりましたが、菖蒲町の御発展を心からお祈り申し上げます。

【著者紹介】本多健一氏は、本多静六博士のご嫡孫にあたる方で、東京大学名誉教授・工学博

士でもあります。現在は東京工芸大学教授として活躍されており、平成四年度には学術分野での最高賞「日本学士院賞」を受賞されました。

編集後記

▽本多静六翁の生誕地菖蒲町において、博士を記念する会が平成四年五月十一日有志により結成されました。記念する会では、この「通信」をとおして全国に向けて博士の業績と人柄を紹介してまいりたいと思っております。

▽顕彰事業についての新聞発表の後、各地から博士にまつわるお便りをいただきました。

新潟県柏崎市にお住まいの浅野重栄門様とは直接お会いすることもでき、学生時代(大正九年当時)に博士の授業を聴講したときの模様や自宅にある「放酒の杉」が博士によって研究されたことなど興味深いお話を伺うことができました。謹んで厚くお礼申し上げます。

▽記念する会のメンバーをご紹介します。会長 島田得一(町農協組合長)、副会長 荒井源治(町議会議長)、同小澤啓(町教育長)、編集委員長 小山千秋(テクノホルテイ専門学校教授)、編集副委員長 伊藤伸一(三箇小学校長)、編集委員 渋谷克美(役場企画課)他に編集協力委員です。

【編集発行】本多静六博士を記念する会
〒346-01 埼玉県南埼玉郡菖蒲町大字新堀三十八番地 菖蒲町役場企画課内
電話 〇四八〇(八五)一一一一(代表)